



乳幼児がいる家庭に、訓練を受けたボランティアが定期的に訪問し、育児支援をする「ホームスタート」の活動が本格化している。子育ての経験者が悩みを聞き、家事を手伝うことなどで親のストレスを和らげ、家庭が社会から孤立するのを防ぐのが目的だ。児童虐待の予防効果も期待され、注目を集めている。

22.10.17

地域の「先輩」が訪問

育児ストレスを緩和

広がる「ホームスタート」

ホームスタートは1973年に英国で始まった。日本では「ホームスタート・ジャパン」（東京都）が2008年に試行を開始。現在では東京をはじめ青森、熊本など各地に11の地域組織が活動し、さらに準備を進めている地域もある。

東京都江東区の高層マンションに住む主婦（41）は、教師の夫（43）との間に、長女（3）と長男（1）がいる核家族。長男が生まれたことで、長女をほったらかし気味にしてしまうことが悩みだった。赤ちゃん返りした長女が、授乳を邪魔し、長男をたたく。

「悪く言ってくれた方が、多分癒やれる」と言う。ストレスを抱える親には、その言葉が救いになる＝東京都江東区

「かわいいわが子なのに、怒鳴ったり、つい手が出ちゃったり。煮詰まって、本当に不安でした」。知人を介してホームスタートを知り、昨年夏に申し込んだ。地域ごとに置かれる組織は「ビジター」と呼ばれるボランティアと、指導的立場の「オーガナイザー」からなる。申し込みがあると、

虐待予防の効果も期待

オーガナイザーがまず訪問。面談して話を聞いた上で、その家庭にふさわしいビジターをマッチングする。2〜3カ月の間、週1回2時間ほど訪問する。主婦宅に派遣されたのは50代のビジター。長男をあやしてもらっている間に、母親は長女を構うことができず。そんな役割分担を自然に続けると、主婦は次第に元気を取り戻していった。主婦は「家事も手伝ってもらい、愚痴も聞いてもらった。数年前まで同じ地域で同じような苦労をした方のアドバイスには、本当に説得力がある」と感謝している。



「自治体の補助や一般寄付で運営されるので、資金面は各国共通の課題です」と話すホームスタート・ジャパン代表理事の西郷泰之さん。東京都豊島区の大正大

ホームスタート・ジャパンの代表理事を務める大正大人間学部教授の西郷泰之さんは「日本の育児支援は、大きく分けて二つの柱がある」と話す。一つは、母親教室など一般の家庭を対象にしたサポート、もう一つは、児童相談所などすでに養育に問題が起きた家庭への介入だ。

問題は、その中間にいる層という。「表面上は何もないが、実はストレスを抱えている家庭」への支援が、日本では極端に不足していた。そこをホームスタートが補うことで、結果として社会全体の虐待予防につながる。

「もっと整備されなければならぬ」と話す西郷さん。「より理解を広げてもうために、効果を目に見える形で証明していきたい」

ホームスタート・ジャパンへの問い合わせは、電話03(5287)5771。